

## ダイヤ式介護技術チェックシート

# 開発の経緯

### 研究の背景と目的

介護保険制度の訪問介護事業（ホームヘルプ・サービス）に従事する訪問介護員（ホームヘルパー）は、訪問介護員養成研修を修了した者または介護福祉士資格を取得した者でなければならないとされています。そのかぎりでは、ホームヘルプ・サービスの提供者の質には一定の基準が設けられているといえます。しかしながら、ホームヘルパーの主力をなす 2 級ヘルパー（訪問介護員養成研修 2 級課程を修了したのみの人）の介護技術は必ずしも十分なものではないといわれています。

訪問介護員養成研修 2 級課程の基本介護技術は 30 時間の実技・実習とされていますが、ほとんどの場合、最低限の技術の習得に終始し、被介護者の心身の状態に応じて柔軟に対応できるだけの介護技術を身につけさせるには至っていません。また、全体としての介護技術を構造化する視点もこれまでありませんでしたから、介護技術の教育はテキストや講師によってまちまちで、おむつ交換や車いすへの移乗などの介護課題ごとに、必要な介護動作や留意点を取りあげ、記憶させるのみになっています。そのうえ、実際の援助場面では求められる援助の内容が多様であるため、就業後に業務を通して介護技術をより確実なものにしていくこと（OJT）も困難であるのが実情です。

ダイヤ高齢社会研究財団は、1999 年（平成 11）から、東京都町田市と共催でホームヘルパーの現任研修を実施していますが、研修に参加するヘルパーの介護技術は十分というにはほど遠い水準にあることがわかりました。基本介護技術を修得しているはずのヘルパーですが、その技術水準には著しい個人差があり、多くの人が自分の介護技術に深刻な不安を感じていました。日常業務で経験することが多いおむつ交換や車いすへの移乗はまだしも、あまり経験することがないベッド上での洗髪（清潔介助）などでは、かつて習ったはずのことがまったく身につけておらず、ヘルパーが感じる不安も強くなっていました。そのうえ、ホームヘルパーを指導する立場のサービス提供責任者にあっても、基本介護技術が十分身につけていないことが少なくなかったのです。介護サービスの質の向上をはかるためには、訪問介護員養成研修 2 級課程に含まれるレベルの基本介護技術を確実に身につけさせることが、まず必要であると考えられます。

そこでダイヤ高齢社会研究財団では、基本介護技術の修得度を簡便かつ客観的に評価できる尺度の開発をめざして研究に着手しました。そのような尺度があれば、介護職の採用と配置を考えると、昇給・昇格の可否を判断するとき、教育や研修の修了判定をするときなどに使用できるほか、個々の介護職の介護技術の弱点を明らかにして学習を促すことができるようになるからです。学習を通して介護技術の水準が上がれば、全体としての介護サービスの質も向上しますし、個々の介護職の不安を解消することも期待できます。

### 開発の手順

ダイヤ式介護技術チェックシートの開発にあたっては、訪問介護員養成研修 2 級課程の講師経験を

もつ介護福祉士 9 人から成る作業部会と学識経験者による研究委員会を組織し、次の手順で作業を進めました。

#### 1. 介護課題・介護動作の選定

最初に、チェック項目の候補となる介護動作を選定しました。介護技術の教科書や参考書を精査して、6 つの領域（ベッド上の体位・姿勢、移動・移乗、更衣介助、排泄介助、食事介助、清潔介助）に属する 23 の介護課題と、それを遂行するのに必要な 465 の介護動作を選びました。介護課題・介護動作の選定にあたっては、訪問介護員養成研修 2 級課程の基本介護技術の内容に依拠し、訪問介護で必要な援助内容と標準的な介護技法を採用することに努めました。

#### 2. 第 1 回プリテストの実施

現任のホームヘルパー 126 人を受験者として 1 回目のプリテストを実施しました。受験者には 23 の介護課題を遂行することを求め、465 のチェック項目（介護動作）について、3 人の評価者がその適否を評価しました。

#### 3. 共通因子の抽出

第 1 回プリテストのデータを解析して、多くの介護課題に共通する介護技術の共通因子を抽出しました。共通因子の抽出は、膨大な技術要素を構造化し、尺度開発につなげるための必要不可欠な作業です。（介護技術の共通因子については、本ホームページにある「ダイヤ式介護技術チェックシートの概要」をご参照ください）

解析の結果、多くの介護課題に共通する 3 つの共通因子が抽出され、「コミュニケーション」「体位保持」「差し入れ動作」と命名されました。解析結果は第 45 回日本老年社会科学大会（2003 年）の老年 5 学会合同ポスターセッションで発表されました。

#### 4. チェック項目の選別

抽出された 3 つの共通因子に沿ってチェック項目を厳選し、介護課題を減じて、6 課題 63 項目から成る介護技術チェックシートの第 1 次原案を作成しました。23 課題 465 項目のチェックシートは膨大で実際の使用に適さないうえ、465 のチェック項目の中には他の項目と重複するものや項目信頼性の不十分なものが含まれていたからです。

また、介護技術チェックシートの第 1 次原案の作成にあわせて、評価者のためのマニュアルを作成しました。

#### 5. 第 2 回プリテストの実施

介護技術チェックシートの第 1 次原案（6 課題 63 項目）と評価マニュアルを用いて、2 回目のプリテストを実施しました。受験者は現任のホームヘルパー 120 人（第 1 回プリテストの受験者とは別人）でした。

#### 6. チェック項目の再選別とチェックシート原案の作成

第 2 回プリテストのデータを解析し、項目信頼性と通過率の観点からチェック項目の選別を行いました。その結果、5 課題 31 項目から成る介護技術チェックシートの原案が完成しました。また、これに合わせて評価マニュアルの改訂を行いました。

#### 7. 試験評価の実施

介護技術チェックシートの原案（5 課題 31 項目）と評価マニュアルを用いて、全国の 8 地点（青

森、大館、鴨川、横浜、秦野、静岡、鹿児島 of 各市と、東京都江戸川区) で試験評価を実施しました。受験者は合計 496 人の介護職で、うち 341 人が現任のホームヘルパー (2 回のプリテストの受験者とは別人) でした。試験評価では、受験者 1 人につき、ホームヘルパー 2 級介護技術指導者である 2 人の評価者がそれぞれ独立に評価を行いました。

いずれの会場でも、試験評価の実施に先立って評価者のための事前講習を行い、評価マニュアルを使って、チェック項目が一連の介護動作のうちどこに位置し、どのように行われたときに「できた」あるいは「できなかった」と評価するのかを解説しました。

#### 8. 解析とダイヤ式介護技術チェックシートの完成

試験評価のデータを解析して信頼性・妥当性の検証を行い、課題とチェック項目をさらに精選して、4 課題 20 項目から成るダイヤ式介護技術チェックシートを完成させました。解析には、試験評価の受験者 496 人のうち現任のホームヘルパー 341 人のデータを用いました。

項目信頼性の評価は 2 人の評価者の完全一致によりました。項目により多少のばらつきがありますが、20 項目の平均では、2 名の評価者が一致した割合が 8 割を超えました。構成概念妥当性の検証には共分散構造分析を用い、3 つの共通因子を第 1 次因子、「介護技術」を第 2 次因子とする 2 次因子モデルの適合度がきわめて高いことを明らかにしました。また、第 2 次因子の因子得点を真値とする信頼性係数  $\omega$  の値が高いことを明らかにしました。これらの分析結果は、4 課題 20 項目から成るダイヤ式介護技術チェックシートの信頼性・妥当性がきわめて高いことを示しています。

信頼性・妥当性の検証結果は、日本老年社会学会の機関誌『老年社会科学』27 巻 1 号 (2005 年 4 月) に掲載された論文「介護技術の測定 —— ダイヤ式介護技術チェックシートの開発」に詳細に報告されています。この論文は本ホームページから PDF ファイルの形でダウンロードできます (学会の承認済)。

#### 9. ダイヤ式介護技術チェックシートの公表と普及

ダイヤ式介護技術チェックシートの信頼性・妥当性の検証結果を記した論文の公刊をまって、チェックシートと評価マニュアルをダイヤ高齢社会研究財団のホームページ上で公開しました。公開に先立って評価マニュアルを修正し、よりわかりやすいものにしました。

以上の作業のうち 1~3 は 2002 年度 (平成 14) に行われ、4~7 は 2003 年度 (平成 15)、8 は 2004 年度 (平成 16)、9 は 2004~2005 年度 (平成 16~17) に行われました。

2005 年度からは、各地で講習会を開催するなどして、ダイヤ式介護技術チェックシートの普及と、それを通しての介護技術の向上に努めていきます。また、共通因子に沿って全体としての介護技術を構造化したうえで教育する教材・教科書の作成を進めます。

(滝波 順子)

